Journal of Osaka Kawasaki
Rehabilitation University Vol.*6.2012*
pp.*109-114*

報　告

人間科学ＳＧＬの教育効果
― 体験学習から得た人間関係とコミュニケーションのスキルアップ ―

The educational effect of Small Group Learning in Human Science
―Effectiveness for improving interpersonal and communication skills―

佐竹　　勝[1)]　富樫　誠二[2)]

要約：本学のカリキュラムの特徴の一つにSGL(Small Group Learning) がある。今回、そのSGLにおいて「人間関係とコミュニケーション・スキルアップ」をテーマに体験学習を併用し、授業を展開した。そこで、内容を経時的に述べるとともに、SGLによる教育効果の検証について報告する。SGL開講の初期には戸惑い、不安がみられたが、中期には知識や経験の蓄積（失敗を含め）とともに、フィードバックによる回想法の導入やActivityの活用をはかるようになった。この時期は学生の行動や態度は明らかに積極性が増していた。コミュニケーションにおいて、人間と人間とが関係していくということの大切さが理解できていた時期でもあった。後期には人間関係を信頼ということばで捉える事の大切さが理解できるようになった。さらにその人の背景をも見ることができるようになった。わずか4か月であったが、その教育効果は確実にあったといえる。今後、さらに経験を増やし、本学のSGLにおける教育方法論を築いていきたいと考えている。

Key Words：SGL、人間関係コミュニケーション・スキル、ブレーンストーミング法、回想法、体験学習

はじめに

当大学では開設初年時よりSGL（Small Group Learning：以下SGLと表記）を導入している。これは少人数でグループを形成し、同一テーマに対して学生が自ら学び、内在する問題を解決していく学習方法である。その目的は、学生が自主的・自発的に勉学に励むための態度や習慣を身につけるために、自らが興味ある学習のテーマを設定し、そこに内在する問題を見出し、問題を解決していく方法や具体的手段を検証していくことである。SGLの主体となるのは学生であり、教員は黒子役が求められる。このSGLは本学の特徴あるカリキュラムの一つとして取り上げ、授業日程も毎週月曜の第一限に配し、初年度教育の重要科目（2単位）として位置付けている。当初よりSGLに対する教育効果を期待する声は大きいが、方法の自由度が大きく、独自性が強いこともあり、すすめ方や評価方法はまちまちである。そこで今回、「人間関係」と「コミュニケーションのスキルアップ」をテーマとしたSGLにおいて体験学習を

Masaru　Satake
大阪河崎リハビリテーション大学
リハビリテーション学部　作業療法学専攻
E-mail：satakem@kawasakigakuen.ac.jp
1）リハビリテーション学部　作業療法学専攻
2）リハビリテーション学部　理学療法学専攻

併用した方法で実施し、その教育効果を検証したので報告する。

対象と方法

■ 対象：4月入学の1年生。理学療法学専攻・作業療法学専攻・言語聴覚学専攻学生が混在する5名1グループ×2組の計10名である。

■ 方法：介護老人福祉施設「水間が丘」で隔週/1回（月曜日）9時～10時の約1時間 共用スペースにおいて、入所者、デイケア利用の皆さんとの対話を体験する。この体験学習の翌週は学内において、自分自身での振り返りを行い、次に改善に向けた話し合いや教官からのフィードバックを行った。具体的には学生個々からの体験報告や疑問・質問についてグループで話し合い、内容によっては解決へのヒントとなるフイッシュボーン・チャートや、回想法のミニ講義を実施することで問題解決への手がかりとした。さらにその都度、自主的に学んだことをレポートにまとめて提出することとした。

■ 導入：施設側の理解と協力を得た後、居合わせた対象者に対し担当教員から挨拶と自己紹介、来所の目的を説明し、了解を得た上で、まずは「挨拶ができる」「話が聴ける」「対話が出来る」という実践課題に取り組ませた。（図1）

結果

学生の「声」･「動き」を集約し、初期、中期、後期の3期に分けて報告する。

■初期の声：H.23.4.11 ～ 5.09

・緊張してうまく話しかける事が出来ず、目線も合わせることも出来ない状態だった。

・話題に困った。何を話しかけたらよいのか、話題はどういう風な感じがいいのか…。

・こちらから一方的に質問するような感じになり不愉快な思いをさせてしまったのではないかと反省している。

・車椅子の操作が解らず、施設の人を呼びに行くということがあり、基本操作、知識を知っておくことがどれだけ重要かということを身をもって体験した。

・返答のない方と接した時、何を話せばいいのかわからなくなった。

・最初は何も考えずにただ喋っていればいいと思い、家族のことやテレビ番組のことを話していたが、しばらくしてふと1人で喋っていることに気が付いた。

・どうすれば相手からも話をしてもらい、対話のキャッチボールをすることが出来るだろうかと考えさせられた。

・また前と同じミスをするのではないかというプレッシャーに押し潰されそうになった。

・対話がなくなると、お互いに話すことがなく静寂が続いていたが、10分程たったとき相手から「緊張しなくていいよ、すぐ慣れるからね」と云われた一言が、気持ちをとても楽にしてくれた。

図1　人間関係とコミニュケーションの基本は挨拶から（水間ヶ丘）

■中期の声と行動：H.23.5.16 ～ 6.06

・事前に話題を考えてくるように工夫した。

・挨拶の重要性に気づきその大切さを感じた。

・「高齢者とのコミュニケーション能力をつける為に自分たちが今出来ること」について二班に分けてブレインストーミング法で意見を出し合い、KJ 法でまとめた。次にフイッシュボーン・チャート（図２）に基づいて特性要因を整理し、情報の共有化とコミニュケーション・スキルアップのためにプレゼンテーションを行った。（図３）

・回想法についての簡単なレクチャーを行ない、高齢者への人間関係とコミュニケーション改善への糸口を探った。いかに導入するかを考えレポートを作成した。

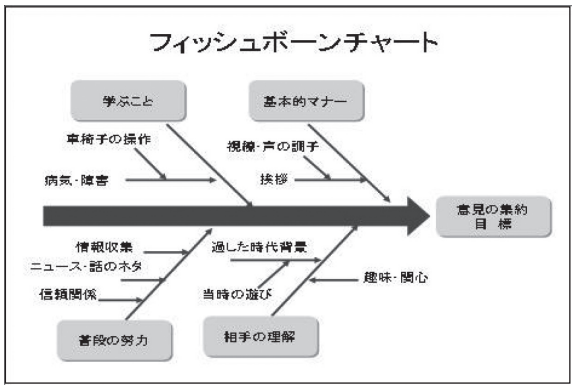


図２　コミュニケーション・スキルアップのためのフィッシュボーン・チャート

図３情報の共有化 (プレゼンテーションの練習)

■後期の声と行動：H.23.6.13 ～ 7.04

学生各自がこれまでの学習体験を基に、事前に Activity を準備、能動的に働きかけた時期である。

・回想法を用いたコミュニケーションでは、入所者の昔のエピソードをいろいろと聞かせていただき、昔の泉州地域を知ることが出来た。

・高齢者が生きてこられた時代の背景などが想像でき、現代と比較しながら自分たちが経験していない昔の生活、遊びなどを知り大変勉強になった。

・思い出を語るにあたって生き生きとした表情が見られ、いつもとは違う感じだった。

考察

課題達成に向けた学生の動きを、結果に合わせ３期に分けて考察する。

■第１期：手さぐりの時期

新学期が始まりグループメンバーの顔名前も分らないまま SGL がスタートした。老人保健福祉施設に入るのも、そこに入所されている高齢者の方々と接するのも、メンバー同士の対話も、大学教員との接触も、何もかもすべてが手探り状態であり、学生にとっては不安と緊張が入り混じったスタートであった。学生の声として、“話が出来るという嬉しさと、初めて施設に入れるという興奮の初日だった。その日の夜にどうすれば相手からも話をしてもらい、対話のキャッチボールをすることが出来るだろうかと考えさせられた”、と述べるなど、初回にしてコミュニケーションの難しさを予見する様子が伺えた。

■第２期：試行錯誤の時期

コミュニケーションをとることの大変さ、難しさに直面。この壁を乗り越える手段、方法を模索する時期であった。この時期のフィー

ドバックとして「ブレーンストーム法」「回想法」のミニ講義を試みた。学生たちはこれらのフィードバックを手がかりに、何とかしなければ、どうすればコミュニケーションスキルアップが図れるか、を真剣に考えた時期である。具体的には、手書きの名刺（文字は太く大きく）を用意したり、小さな手作りプレゼントを考えたり、一緒に行う簡単な手工芸を準備したりというものであった。

【学生が準備した Activity】

①手作り名刺（大きく太めの文字）

② ちぎり絵

③ 折り紙

④ 昔の話題

■第３期：自信の獲得、達成感成就の時期

臨床体験学習の後半は、回想法に基づいた対話の工夫や回想法を取り入れたレクリエーション、「ちぎり絵」など Activity を積極的に利用して言語的コミュニケーションをより発展させることができ、学生にも利用者にも深い満足感をもたらした時期であった。

具体的には、学生と利用者が円になってカードを使ったゲーム（内容は、子供の頃にした遊び、学生時代の思い出、ふるさとの話、など回想法を取り入れたテーマ）や、間違い探しゲーム（記憶や認知機能の刺激）を行なった。回想法を取り入れたゲームでは、お互いの過去や趣味を知ることが出来たり、昔の話をいきいきとされたり、笑顔が見られなかった方が、昔に従事していた仕事の話になると笑顔で話されたり、利用者間の交流増加が見られるなど、これまで観察されなかった新たな発見がみられた。最後は全員で「ふるさと」を歌い終了となった。帰り際には「孫と話してるようで嬉しかった」「楽しかった」「また遊びにおいで」という言葉を受けて、「やり甲斐」や「一体感」「達成感」を感じ取ったようであった。（図４）

このように、作戦が成功するとそれが自信となり、対話の量、声の大きさ、笑顔、相互交流の増加といったプラスの反応が、学生側、利用者側相互に誘発され、満足感、達成感、感動や喜びをもたらせたものと考える。短い期間であったが、学生全員がコミュニケーションに悩み、それについて考え、挨拶や傾聴の重要性や非言語的コミュニケーションの大切さを実感し、Activity と回想法の実践とその成果を経験して SGL を終了した。

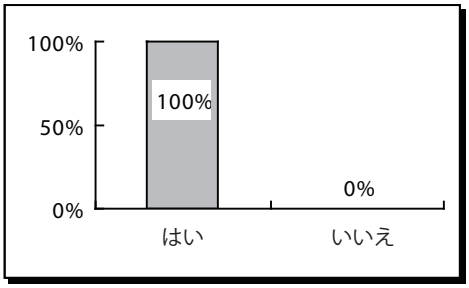
図４　回想法を取り入れたゲーム

■終了時のアンケート結果

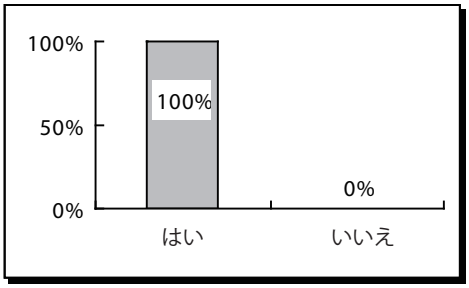
最終時において、同意を得た学生９名に SGL による体験学習に対するアンケート調査を実施した。質問項目は、① SGL で体験したことは楽しかったか、②コミュニケーションの難しさを理解したか、③コミュニケーションの重要性を理解したか、④ SGL の流れはよかったか、⑤フィードバックの頻度はよかったか、の５項目である。その結果を図４に示す。

全員がコミュニケーションの難しさを理解し、かつその重要性を理解している。今回の SGL の学習の流れは満足のいくものであった。こういった学習はフィードバックが重要であるが、その頻度は適切なものであったといえる。（図５）

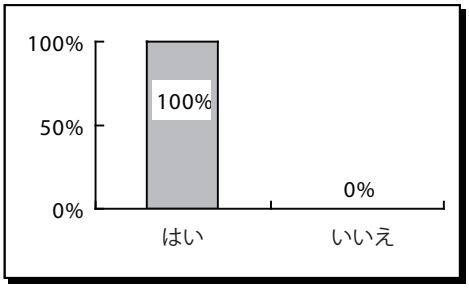
質問１：SGL で体験したことは楽しかったか。



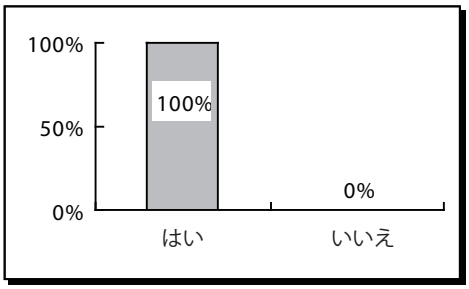
質問２：コミュニケーションの難しさを理解したか



質問３：コミュニケーションの重要性を理解したか



質問４：SGL の流れはよかったか



質問５：フィードバックの頻度はよかったか

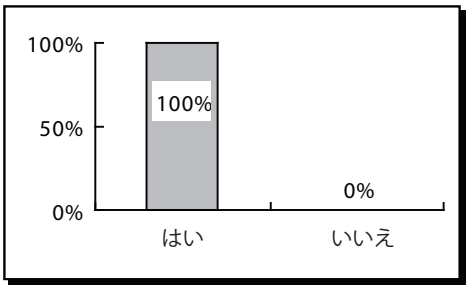


図５　SGL 終了時のアンケート調査結果

■この SGL で学んだこと

・挨拶の重要性。
・自分の思っていることを押し付けるのではなく、相手の話を傾聴すること。
・コミュニケーションを取ることの楽しさ、難しさ。
・相手の立場に立ち、何を望んでいるか考えること。
・非言語コミュニケーションの大切さ。
・プレゼンテーションとしての基本的技術（スライド作成、パワーポイントの使い方、時間の使い方、間の置き方、声の大きさ、抑揚、話すスピード）（図６）
・レポートの書き方

図６ Power point でスライド作成

まとめ

SGL 授業は利用者側も学生側にも満足のいく結果を残して終了した。最後に教育的視点から有意義であった４項目を挙げてまとめとする。

１）SGL 人数が適正数（4 ～ 5 人）であったこと。
適正数（5 人）が有利に評価される理由として次の点が考えられる。
①終始安定した心理状況（集団凝集性）が維持出来たこと。
② Communication が容易であったこと。
③学生の出席率がよく、能動的な行動、態度が促進されたこと。
④学生個々相互の理解が深まり、親密な関係が早期に出来上がったこと。
⑤われわれ意識（凝集性）が高まり、グループとしての協調行動がとれたこと。

２）Activity は人間関係の潤滑油となる。
Activity が有利に評価できる理由として以下の４項目を挙げることができる
①お互いに不安､緊張状態のときは緩衝材（回想法、ちぎり絵、折紙、レクリエーション）として、人と人の関係を滑らかにする作用がある。
②利用者の興味・関心を引き出しやすい。
③具体的活動であり、難易度も小さく、過去の経験もあり、結果が分り易い。
④回想法の内容は、多くの高齢者が歩んできた道であり、なつかしさや郷愁が遠い記憶を呼び醒ます。今後活用するに値する Activity であることが実証できた。

３）臨床現場は、現実検討を促す社会の鏡である。
基本的な挨拶や衛生感覚、時間感覚、服装、態度等、社会性やルール、マナーの実践教育の場として有効であった。

４）体験学習はフィードバックが重要である。（図７）
適切なフィードバックが学生の能動性を高める。良いも悪いも成果が自分の目で確認することができるため、成就感、達成感が得られ易く、学生のモチベーションを引き出し易い。

図７　最終のミーティングとフィードバック

今回の SGL 実施にあたり、介護老人福祉施設「水間ヶ丘」の坂ノ上五十鈴施設長他職員皆様のご理解と、話し相手になっていただいた利用者の皆さんにご協力頂きました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

［文献］

１）川喜田二郎“発想法”, 中公新書 , 中央公論社 ,1967
２）川喜田二郎“続発想法”, 中公新書 , 中央公論社 ,1970.
３）遠藤英俊“いつでもどこでも「回想法」”, ごま書房 ,2005.
４）黒川由紀子　“認知症と回想法”金剛出版 ,2008.
５）野村豊子　“回想法とライフレヴュー―その理論と技法”中央法規出版 ,1998.
６）黒川由紀子 , 松田　修, 斉藤正彦“老年臨床心理学―老いの心に寄りそう技術”有斐閣 ,2005.
７）佐竹　勝“精神障害作業療法学講義ノート「グループの治療性」”